漫才「夏と冬」

大河内健詞

［配役］
男１（ボケ）
男２（ツッコミ）

男１　暑いなか来ていただいてありがとうございます
男２　ほんとありがとうございます
男１　暑いですねー、嫌になっちゃいますねー
男２　もう夏だからね
男１　とりあえずさ、こんな感じで天候の話をしとけばいいかな
男２　いきなり何聞いてんだよ
男１　話すこと無いときはとりあえず天候の話をしておけば、その場をやり過ごせるって聞いたことがあるからさ、それでこの場を無難にやりすごせないかな
男２　後ろ向きすぎだろ！　もっと積極的にしろよ
男１　よし、このなかで北海道から来た人手上げて！
男２　攻めすぎだろ客いじりは！
男１　ひえー、誰も手を上げない
男２　当たり前だろ
男１　早くも四面楚歌だあ
男２　追い詰められすぎだろ
男１　だって楚歌が四面から聞こえて来るよ
男２　ほんとかよ
男１　だって、ソーソーソー、ソソソー…
男２　ごめん、楚歌ってそのソじゃねえんだ
男１　そ、そのそ？
男２　めんどくせえな！　そのは代名詞のそので、中国に楚って国があって、その楚の国の歌が
男１　そのその？　そのそ・の？
男２　あーもう！　だからそのは代名詞で！
男１　（無視して）皆さん！　夏と冬、どちらがお好きですか？
男２　無視すんなよ！
男１　（無視して）僕は断然冬です。お前はどっちが好き？夏と冬。
男２　何だよこの急展開は！

男１　春とか秋とか空気読めないこと言ったら、今すぐこの場から出てもらうぞ！
男２　いきなり厳しいな！　てか出てったら困るだろ
男１　さあ、はっきりしろ！　（脇に手をつっこんで不審な動きをする）
男２　ええ何してんの
男２　（何事もなかったように）夏か！　冬か！
男２　あー、夏だよ！　断然夏！
男１　あ～、来ました来ました夏男！　へっ！
男２　何で馬鹿にされるんだよ！　いいじゃねえか夏楽しいだろ
男１　夏をなめんなよ、夏は死と隣り合わせの季節なんだぞ
男２　どこが死と隣あわせなんだよ
男１　例えば、食中毒、熱中症、水不足
男２　あーそうだね
男１　汗、肥満、名古屋場所！
男２　関係ないよね、死と名古屋場所は！
男１　だって横綱とか大関がどんどんいなくなってんだろ！　あれ死んでるんだろ
男２　ちげーよ、どっちかといえば社会的な死だよ、というかこの話題やめといたほうが、
男１　そもそも、ただでさえ暑い名古屋で７月に相撲なんて正気の沙汰じゃねえだろ！
男２　いいじゃねえか見てるだけだろ！
男１　見てるだけでも暑くて死にそうだよ！
男２　じゃあ見んなよ！
男１　面白いから見ちゃうんだよ！
男２　じゃあ名古屋がだめなら北海道とか涼しいとこでやればいいんだな！
男１　それは地元の財界が絡んでるからできないんだよ！
男２　じゃあ我慢しろ！
男１　我慢する！
男２　お前は何が言いたいんだー！
男１　俺は暑いのが駄目なんだってことが言いたいの
男２　結局そんなことかよ！
男１　もう暑くてさ、この場で意識を保つのが精一杯だよ
男２　え、今もそんなに？
男１　この世のものとは思えないもの見えてるし
男２　それ幻覚じゃね？
男１　幻覚かはわからないけど、骸骨みたいな顔で、黒装束着て、大きな鎌を振り上げて、
男２　死神だよそれ！
男１　え、だってお前の後ろに…
男２　ちょっと！　それ俺が死ぬみたいじゃねえか！
男１　なーんてね、涼しくなったかい？（おどける）
男２　むかつくなあ！　ならねえよ！　俺暑くないからそういうの要らないし！
男１　え、暑くないの？
男２　暑いのは平気、むしろ寒いのが苦手
男１　え、じゃあ北極圏行くときどうしてんの？

男２　行かねえよ北極圏は！
男１　え、じゃあ火星行くときどうしてんの？
男２　行かねえよ、というか誰も行ってねえよ！
男１　え、じゃあ液体窒素かぶるときどうしてんの？
男２　液体窒素かぶらねえよ！　そんなもんかぶったら俺で釘が打てちゃうだろ！カチーンって！
男１　（無視して）じゃあ冬はどうしてんの？
男２　あ、流した。冬はね、着込んでるよ。
男１　どんだけ着込んでるの？
男２　まずヒートテック、その上にホッカイロ、またヒートテック、シャツ、ニット、ジャケット、ダウンジャケット、マフラー、手袋、あとニット帽で完璧。
男１　下半身は裸か
男２　違えよ！　省略したんだよ下半身は
男１　お前下半身省略できんの？　すげえな！
男２　省略はできない！　ただ言わなかっただけ！
男１　だよな、お前の人生において下半身は省略できないよな
男２　そいう下ネタ的な意味じゃなくて！　着るもの言わなかっただけ！
男１　じゃあ何着てるんだよ
男２　まず普通にパンツだろ
男１　女性用です
男２　パンティーじゃねえよ！　普通にトランクス！　そのうえにヒートテックのタイツで
男１　ドーン！　ってやります
男２　江頭２：50じゃねえよ！　普通にはいて、ジーパンはいて、靴下二枚履いて
男１　靴が買えないんですねかわいそうに
男２　違えよ！　２枚目は靴の代わりとかそういうんじゃんくて、その上に靴は履くから！
男１　お前そんなに着込んでたら、もっこもこで、こんな歩き方になるんじゃねえか？
男２　確かに歩きにくいけど、そこまではならないよ
男１　そんなもっこもこじゃ、そのまま出羽海部屋入れるぞ
男２　たのもー、じゃねえよ！　何で俺が相撲部屋入るんだよ
男１　だって、大きな部屋に入りたいって言ってたじゃん
男２　それは一人暮らしの部屋の話！　規模的な意味じゃなねえし
男１　つっぱりしても大丈夫な丈夫な部屋に入りたいって言ってたじゃん
男２　しねえよつっぱりは！　単に鉄筋コンクリートがいいって言っただけ！
男１　毎日ちゃんこが食べたいって言ってたじゃん
男２　料理つくってくれる彼女が欲しいって言っただけ！何で相撲につなげるんだよ！
男１　ごめんなさいもう絶対相撲の話しません
男２　謝るなよ
男１　今度相撲の話したら、俺に張り手してくれ
男２　言ったそばからすんな！　ていうか、服着込んでる時点で相撲部屋には入れないから
男１　そうだよお前着込みすぎだよ
男２　お前も冬は着込むだろ

男１　着込まないよ全然。Ｔシャツに短パンだよ
男２　えー、まじかよ、絶対寒いだろ
男１　全然寒くないね！　Ｔシャツに短パンで十分
男２　あー、なんかいるよねそういう小学生、クラスに一人くらい
男１　いるいる
男２　バカだよねー、
男１　それが私です
男２　あ…そう
男１　でも俺を一緒にすんなよ！　俺は小２のときガンジーの伝記を読んでな、非暴力不服従を学んだんだ。だから自分も半そで短パンで不服従を表しだんだよ
男２　何に不服従したんだよ
男１　冬は厚着するっていう常識に対してだよ！
男２　なんだそれ。で、抵抗の結果は？
男１　無駄である、だったね
男２　やっぱバカじゃん！
男１　めっちゃ寒かったー。九句覚えてるどころじゃなかったよ。
男２　何してんだよ。というかその時は寒かったってこと？
男１　うん
男２　じゃあいつから寒さに強くなったわけ？
男１　たしか朝昇竜が引退したころ
男２　最近じゃねえか！　てかまた相撲だし
男１　急に全身だるくなって、熱計ったら３９度あってさ
男２　それインフルエンザだね
男１　医者にいったら、『おめでとうございます。ニュータイプです』って言われて
男２　新型だよ新型！　ガンダムじゃねえよ
男１　ついに俺も進化した！　って思ったよ
男２　喜ぶな！
男１　それからずっと熱が下がらなくて、今に至るんだけど
男２　えー！　ずっと治ってないの？
男１　そうなんだよ、ごほごほ
男２　こら！　俺にうつすな！
男１　やっぱ変ですかね（客に）ごほごほ
男２　お客さんにうつすな！
男１　自分なりに熱を下げようとはしてるんだよ
男２　どうやって
男１　ちょっとした暇さえあればカキ氷を食べてる
男２　それ手段として間違ってるって！
男１　滅茶苦茶カキ氷食べてるのに全然熱下がらないんだよ
男２　どんだけ食ってんだ
男１　今お前と話してる間にも食べたよ
男２　いつだよ！

男１　さあ、はっきりしろ！　（脇に手をつっこんで不審な動きをする）夏か！冬か！
男２　そこかよ！　てかそんなとこ入れてるの？
男１　ひんやりして気持ちいいよ。欲しい？
男２　要らねえよ汚いな
男１　じゃあお客さんにこうやってわー！っと
男２　やめろよ！
男１　あ、この動き！　塩まく代わりにカキ氷まいたら名古屋場所も快適なんじゃない？
男２　また相撲になってる！　お前にとって相撲は何なんだ
男１　相撲はめっちゃリスペクトしてるから
男２　どういうふうに
男１　肥満もあれだけすれば立派なもんだよ！
男２　絶対尊敬してないだろ！
男１　…（無言でつっぱりをする）
男２　（怒って）あー！　もう！　お前と全然合わねえな！
男１　だってお前は寒がりで俺は暑がりだから、いつもどっちかが調子悪いんだよ！
男２　じゃあコンビ解散だ！
男１　いや、いっそのこと二人で一つになろう
男２　やめろよ気持ちわるいな！
男１　いや肉体的って意味で
男２　より気持ちわるいわ！　じゃあ夏と冬でお互いソロ活動しよう、な？
男１　やだよー、せめてコラボしようよ。TUBE with 広瀬香美みたいに
男２　そのコラボは成立しねえ！
男１　やっぱ春か秋が一番いいってことだね
男２　出てけ！